

まぼろしの備前醤油を求めて－300年の歩み－

共催：玉野市文化財保護委員会・玉野市教育委員会

はじめに

奈良時代の王朝貴族が用いていた料理の調味料のうち、穀物を発酵させた穀^{こく}醬^{びしお}は味噌・醤油へと発展しました。和歌山県の湯浅醤油には、鎌倉前期に中国から味噌の液汁から醤油を絞り出す技術が伝わったという伝承があります。室町時代には、日明貿易でもたらされた「唐味噌」が日本の醤油の製法に影響を与えたとされます。やがて、煎った麦と蒸した大豆に麴菌をつけ、食塩水を加えて発酵させ、熟成後、搾った生醤油を加熱処理して製品化するという、醤油造りの工程が完成しました。それは戦国時代中期の京都でといわれています。

近世に入ると、京都では地造醤油醸造が盛んで、江戸には醤油供給産地として千葉県銚子と野田が台頭してきます。銚子のヤマサ醤油初代浜口儀兵衛は、湯浅の隣村の出身で、元禄年間(1688～1704)に銚子で味噌・醤油造を始め、湯浅と同じ濃口醤油を伝えたといえます。一方、天正年間(1573～92)に開始とされる龍野醤油は、寛文年間(1661～73)に淡口^{うすくち}醤油を発明して京都・大坂に出荷し、享保期(1716～36)には京都の地造醤油屋を圧迫するようになります。

このような醤油醸造業の動向に対して、「備前^{びぜんしょうゆ}醤油」が参入してきます。この備前醤油とは、岡山県南の旧児島郡東部を中心に、上道郡・邑久郡・岡山城下に台頭した醤油産地です。京都市場には享保11年(1726)頃から登場し、宝暦5年(1755)には9軒の備前醤油販売店が、京都町奉行所に株仲間の認可を申請するほどになります。

この備前醤油の存在は今まではほとんど知られていませんでした。今回、幻となっていた備前醤油の盛衰の歴史を、その中心地だった地元玉野市から紹介します。

1 近世の備前醤油

京都で盛んに造られるようになった醤油は、近世中期の宝永年間(1704～11)には、京都で百数十軒もの醤油醸造家が存在していました。それから約50年後の宝暦年間には85軒ほどになっていました。その宝暦5年(1755)、備前醤油の醸造家が京都での販売を拡大する動きを強め、翌年2月、京都町奉行所に株仲間の結成を願い出ました。この時の醸造元6軒と販売担当者9人をまとめたものが次頁の表1です。例えば、備前八浜の牛窓屋伝右衛門

(正しくは伝左衛門)家の醤油を、京都在住の手代長右衛門が京都川原町三条で販売したいということです。福部屋は同じ八浜の業者で、岡山城下の三島屋、居住地の見えない^{かどや}廉屋・淀屋・小堀屋も手代を京都に派遣して店を開いていることがわかります。

これに対して、京都町奉行は京都の地造り醤油仲間に身元調査を依頼しました。その結果、備前醤油は

表1 宝暦6年(1756)備前醤油醸造元とその販売者

備前での醸造元	販売者	居住地
備前八浜 牛窓屋伝右衛門	手代 牛窓屋長右衛門	川原町三条下ル町
備前 福部屋藤四郎	手代 福部屋又左衛門	同上
備前 廉屋次三郎	手代 廉屋三右衛門	同上
	両替伊勢屋源兵衛 手代枳屋喜右衛門	川原町三条下ル町
備前岡山 三島屋十右衛門	手代 三島屋次郎兵衛	川原町三条上ル町
	備前国者 岡山屋久次郎	木屋町四条上ル二丁目
備前 淀屋与三十郎	手代 淀屋庄七	木屋町三条下ル町
	京住人薪商丹波屋 半兵衛忼勘助	同上
備前 小堀屋久左衛門	手代 小堀屋市右衛門	木屋町三条上ル町

『京都醤油史蹟』59～64頁よりまとめる。『龍野市史』第5巻274・277頁には廉屋三右衛門は加登屋三右衛門とあり、「かどや」の読みである。

30 年ほど前の享保 11 年（1726）頃に京都で販売を開始しその後、一族や番頭などを派遣して出店を構えて盛んに商いをしていると報告しています。これらは大正 5 年（1916）に出版された『京都醤油史蹟』という古書に掲載されています。

宝暦 6 年の株仲間結成の嘆願は、宝暦 11 年（1761）に「他国醤油^{にあげ}荷揚問屋」という名称で許可されました（『龍野市史』第 5 巻）。仲間数は備前醤油のみ 7 軒でしたが、安永 2 年（1773）には京都地造^{じづくり}醤油仲間^{じづくり}に加入し、同 8 年（1779）には 21 軒と固定されます。これは龍野醤油の販売業者も加えるため、龍野最古の醤油屋丸尾屋も天明 4 年（1784）に正式に加入します。

ところが、同 8 年（1788）、京都に大火が起こり、京都の地造醤油屋のほとんどが焼失します。その再建は進みますが、この大火をきっかけに、備前や龍野などの醤油醸造元が京都への販売を拡大していきます。寛政 5 年（1793）の醸造元は、備前で 10 軒、龍野で 7 軒、姫路 2 軒、酒造地^{なだ}灘大石で 2 軒の合計 21 軒ですが、文化 4 年（1807）には備前 8 軒、龍野 7 軒、姫路・灘各 2 軒に英加^{あが}（姫路市飾磨区英賀か）1 軒となります。同 14 年（1817）には、他国醤油売問屋に定められた京都出荷枠で、備前が 8 升樽で約 1 万 8 千樽、龍野・姫路・英加の播州が約 3 万 7 千樽、灘が約 5 千樽と、龍野醤油が優勢になっていきます。

寛政～文化期の備前醤油の醸造元をまとめてみると、表 2 のように、旧児島郡 9 軒、旧邑久郡と岡山

表2 近世中後期の備前醤油醸造元

居住地	宝暦6年(1756)	寛政5年(1793)	文化4年(1807)	天保6年(1835)	天保13年(1842)	嘉永7年(1854)	明治元年(1868)	姓
八浜	牛窓屋伝左衛門	牛窓屋寿之助						那須氏
	福部屋藤四郎	福部屋又五郎						平岡氏
歌見				郡屋武吉		(郡屋武吉)		平岡氏
				油屋兵八		油屋利八(良)		高島氏
児島郡		栄屋万次郎			栄屋喜代助	栄屋栄蔵		？
				北澄屋真助	北澄屋助太郎			窪田氏
				井穂屋惣兵衛				？
				鍋屋幸左衛門	鍋屋幸三郎			青山氏
					鍋屋治助			青山氏
					辻屋要助	辻屋与助		？
					福田屋半兵衛			北窓氏
		綿屋次郎兵衛						？
	北浦				郡屋文助	郡屋平助		片山氏
					郡屋辰五郎	郡屋馬五郎		片山氏
番田		中屋紋次郎			中屋三郎右衛門			近藤氏
胸上		吉田屋竹次						井上氏
		板(伊田)屋庄七						？
下村		笹屋又七						？
？			岩田屋文八					？
邑久郡	幸田・乙子・水門・南幸田	亀屋宇平(卯兵衛)			片岡屋五郎左衛門			？
						児島屋幸左衛門		？
					今蔵屋鍋次郎			？
	新田				西屋弥之吉			？
								？
岡山城下	三島屋十右衛門							？
		灰屋又七郎						？

『京都醤油史蹟』、『龍野市史』第5巻等よりまとめる。なお、このほか居住地不明者に、宝暦6年の藤屋次三郎・淀屋与三郎・小堀屋久左衛門、天保13年の伊勢屋宗兵衛・磯屋寛左衛門・市場屋源太郎・市場屋七左衛門・塩屋重右衛門・万屋儀兵衛・吉野屋虎之助、明治元年の島屋小右衛門がある。

久郡と岡山城下が 1 軒ずつです。中でも、八浜・番田・胸上の現玉野市内が 5 軒を占め、最も盛んであったことがわかります。しかし、天保期以降には、八浜の老舗牛窓屋と福部屋が消え、代わって郡に栄屋・北澄屋

・鍋屋・辻屋など、北浦に^{こおり}郡屋 2 軒が創業し、新たな中心地となっていきます。また、邑久郡南西部にも新たな業者が現れます。こうして、江戸中後期に児島半島東部を中心に発達した備前醤油は、京都市場に醤油を移出する一大産地だったことがわかります。

しかし、現在、近世の備前醤油の醸造家史料は廃棄されてほとんど残っていません。そのため、各家の墓石調査等により、八浜・郡・北浦の醸造家のいくつかを紹介します。

八浜・牛窓屋那須家 八浜・旧蔵泉寺^{ぞうせんじ}の裏山麓にある那須屋の墓所には伝左衛門（1782 没 66 歳）と孫の寿之助^{じゅのすけ}（1816 没 34 歳）の墓が確認できます。また二人の間には、八浜村名主を務めた文人の牛窓屋耕助（増太郎とも、1817 没 72 歳）の墓もあります。一方、元文 6 年（1741）1 月に岡山藩主の八浜八幡宮への代参が牛窓屋伝左衛門宅に宿泊している記録があります。当時は伝左衛門の父（伝左衛門 墓石未詳）が当主と思われ、牛窓屋はこの時すでに豪邸を構える有力商人であり、醤油醸造も行っていたと推測できます。しかし、寿之助の早逝で醤油造りは終わりを告げ、牛窓屋は 3～4 代の間 70 年間ほどの操業であったと推定されます。その屋敷地は、明治初年の地図Ⅱで八浜本通りの中央部にあり、八浜旭橋^{あさひばし}付近にあった港から京都大坂に向けて醤油を積み出していたと思われます。



那須伝左衛門墓

八浜 福部屋平岡家 福部屋の墓地は牛窓屋の北隣りにあり、藤四郎敷忠（1778 没）、又五郎（諱克忠^{いみな} 1837 没 64 歳）が確認できます。二人の間に又五郎（諱穀忠～1780～没年・墓石不明）があり、寛政 5 年と文化 4 年の又五郎がどちらかはわかりません。一方、元文 5 年（1740）8 月の八浜八幡宮の祭礼で、岡山藩主の代参が福部屋藤四郎宅に宿泊している記録があり、藤四郎はすでに藩士を宿泊させるほどの屋敷を構えていました。さらに代参たちは、八浜のだんじりを八浜本通りの西部にある福部屋前で観覧したとあります。このことから、福部屋が牛窓屋より北寄りの本通りにあったと思われます。しかし、又五郎克忠の死後、醤油造りは中止されたと思われ、福部屋はこの三代 100 年の間、醤油醸造で栄えました。



平岡藤四郎敷忠墓



左は八浜八幡宮に奉納されていた廻船絵馬です。左下の墨書銘に「平安宮脇景輔景福画」とあり、京都の絵師宮脇景福^{みやわきけいふく}の作だとわかります。宮脇景福は、文政～天保年間の京都絵師として

見え、この奉納絵馬が 19 世紀前半の製作と推定されます。絵馬は 13 反帆の中型和船で、拡大した船上の小船に(福)の屋号が見えます。これはこの福部屋の可能性が高く、当時の当主又五郎克忠が寄進した絵馬だと思われます。船上に樽は見えませんが、このような船で京都に醤油などを運んでいたのでしょう。（平成 4 年に岡山県立博物館寄託保管）



平岡武吉墓

八浜 郡屋平岡家 八浜の二大老舗醤油屋が操業を停止したあと、彼らに代わって京都に醤油を送ったのは郡屋^{こおり}です。墓所は牛窓屋の南隣りに江戸初期の墓から残っており、平岡武吉^{ぶきち}

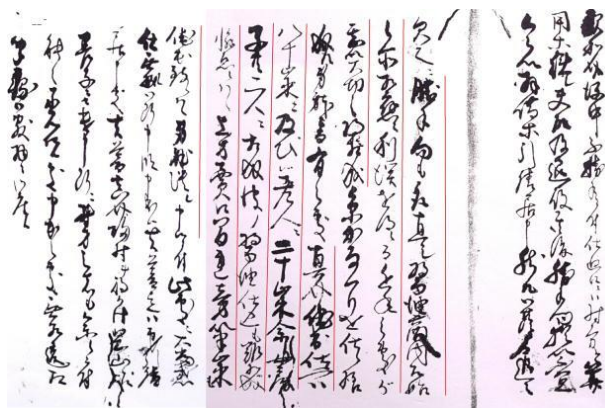
(1854 没 55 歳) のものもあります。しかし、同家で醤油醸造を始めたのは武吉の父周吉(1828 没)です。文化4年(1807)に八浜八幡宮宮司尾崎多門から、醸造蔵の清め札を受けています。しかし、武吉が亡くなったあと、醤油造りは止めたと思われる、二代50年ほどの操業であったと思われます。明治初年の地図には福部屋の屋敷地は見えませんが、郡屋の屋敷地は牛窓屋の北に、八浜本通りに面して広い土地が見えます。

郡 北澄屋窪田家 窪田家の墓所は郡・掌善寺の墓地にあり、「窪田翁諱雅嘉字真助号琴風」(1830 没 54 歳)と「窪田助太郎重喜」

(1849 没)と刻まれた墓石が残っています。真助は郡村の名主も勤めており、文化6年(1809)に起こった児島湾の漁業権をめぐる児島郡と備中国都宇郡妹尾村等との幕府訴訟には、児島方惣代として同10年(1813)10月から江戸に下っています。12月に帰国したあと、再度の江戸出張命令に対して、下の写真史料のように難色を申し出ます。これにより真助は、天保期よりも20年以上も前に京都向けの醤油造りを行っていたことがわかり、子の助太郎までの二代50年間ほど、郡村で醤油醸造業を続けたものと思われます。



窪田真助墓



真助(当時は久保田真介と署名)は、父和介の名主時代の負債を引き受け、こつこつと返済してきました。そして、(ここから書状の赤傍線部分)勝手向きもよくなり、醤油商内を始めて相応の利得も生まれ、大切な道になってきたとあります。しかし、自分がまた江戸に惣代として出張を命じられたら、老父と妻子

では醤油仕込みができず、上方への出荷もできなくなり、身代が潰れると訴えています。(出展：岡山県立記録資料館複製資料 大崎三宅家資料「内海御用留」文化11年1月13日付 上野八郎平・大崎安太郎宛北方村千右衛門書状中の真介訴状)

岡山県立記録資料館提供

郡 鍋屋青山家 青山家の墓所は郡の中心部の萬年寺墓地にあり、三世「青山幸左衛門諱基忠」(1854 没 86 歳)と刻まれた墓石が鍋屋幸左衛門の墓に当たると考えられます。その大きさは初代・二代鍋屋弥左衛門の墓よりさらに大きく、醤油醸造業などで財を成したようです。幸三郎の名を刻んだ墓は見当たりませんが、青山幸吉(1891 没 77 歳)の墓が該当すると思われます。青山家の屋敷地は郡港の近くにあり、江戸後期から明治中期にかけて、京都に醤油を送る有力醸造元として栄えました。



青山幸左衛門墓

北浦 郡屋片山家 片山一族の墓所は北浦・慈性庵裏山の墓地にあります。墓所の正面に13代当主「片山辰五郎淳貞之墓」（1839没）、その左に子片山馬五郎（1816～80）の墓が立っています。馬五郎の墓碑には「營農且醬釀、謹身勸業家計亦繁殖」と刻まれ、農業と醤油釀造により家産の繁殖をはかったとされています。一方、この墓所の左手奥には郡屋文助の大きな墓があります。墓石には片山「文輔」（1791～1860）と記され、妻は郡・窪田家から迎えています。その墓碑には「長清宗家継…清宗為里正」と刻まれ、長男が跡を継ぎ、里正（北浦村名主）にもなったとあります。北浦村では文政7年（1824）～嘉永2年（1849）に文介が、翌3年から平介が36歳で名主に任命されています（旧版『倉敷市史』第8冊）。このことから、郡屋文助と平助は親子で、醤油作りを営み、北浦村名主も世襲していたと判断できます。ただ、片山平助の墓石は俗名が刻まれていないためか、確認できていません。



片山辰五郎墓

2 備前醤油釀造組の結成

幕末以来3～4割の業者が廃業したという備前醤油は、明治維新期の混乱の中から経営再建や組織再興をめざす若き釀造家が現れます。児島郡北方村の合田俊三、番田村近藤三郎二、郡村の高階弥太郎・喜一郎らです。彼らは、共同結社を組織し、釀造技術を研究し製品の向上を図り、龍野・湯浅・小豆島との四ヶ国同盟を築いて京阪市場での利益を回復しようと考えます。

当時、岡山県は民権運動のたかまりの中、明治12年（1879）3月に第1回岡山県会が開かれます。児島郡からは、近藤三郎二の本家近藤紋次郎（諱和之1829～1895）が民権派の議員として当選しました。そのような社会情勢の中で、彼らは同業者宅を回って結集を呼びかけ、同年10月18日に設立集会の開催にこぎつけました。

会場は郡の向上寺で、参集したのは30名でした。まず、合田が設立の趣旨を説明し、彼の起草した組織規則案をもとに討論決定していきました。7つの地区に小組合を設けて7人の「担当者」を選び、醤油を輸送する10隻の運漕船との契約も結びました。11月5日には、彼ら4人と担当者7人に、郡で醤油釀造をしていた士族授産会社篤好社の社員らも加



郡 向上寺跡

わり、組合の名称を「備前醤油釀造組」と決定しました。さらに12月1日には、役員投票の結果、組頭（会頭のこと）に篤好社、副組頭に近藤三郎二、年番に高階喜一郎・合田俊三が選出されました。こうして、備前醤油の釀造家たちは、成文規約や役員の任期制など、近代的な組織運営を取り入れた同業組合を結成したのです。

北方 合田俊三 児島郡北方村（玉野市北方）の合田俊三の家は、名主・大庄屋を務めた合田清五郎の次男善兵衛（1840 没 74 歳）が分家初代です。善兵衛は酒造業を営み、名主役も拝命します。俊三は邑久郡西幸西村野崎氏から合田家に入婿した四代目です。合田家の墓所は北方・瑞泉院近くの墓地にあり、俊三（1889 没 45 歳）の墓碑には「為人慷慨、而存義烈」と刻まれ、不正不義を憤り、義を守る心が強い人物であったとされています。養父が病気になったため、「自奮自励」して日夜家業に従事し、親友の助けも得て、ついに家産を再興しました。

俊三が醤油造りを始めたのは明治初年と思われます。家産再建をめざす彼は、同志とともに備前醤油の復興にも取り組みます。その理念は、明治 12 年（1879）、彼が起草した「知新社緒言」や「知新社規則」にまとめられます。この「知新社」は民権派の政治結社や産業結社の名称に近く、彼らが岡山県の自由民権運動に影響を受けていたと考えられます。

やがて社名は「備前醤油醸造組」と決定され、年番に選出され俊三は、高階喜一郎とともに龍野に赴き、新組織の結成通知や将来の連合樹立を希望して帰岡します。翌年、俊三は醤油価格の交渉のため京都大阪に出張するなど、活躍します。俊三の年番は 1 年任期でしたが、同 20 年には組頭に選出されます。しかし、同 22 年（1889）10 月 27 日、病いのため 45 歳の若さで急逝し、醤油業は長男精一郎



左が合田俊三墓

（1871～1922）に引き継がれます。

右は明治 31 年備前醤油醸造組
が建立した合田俊三君記念碑

郡 高階弥太郎・喜一郎 郡では、明治 10 年（1877）から村の副戸長を務めていた高階弥太郎と同喜一郎が、備前醤油再建のため尽力します。同 12 年 11 月の創立会場となった向上寺も、彼らの手配であったと思われます。12 月には高階喜一郎が合田とともに年番に選ばれ、ついで龍野に派遣されます。翌年も組合幹部として活躍し、組合に納めた出資金は弥太郎とともに 200 円ずつで、加入者の最高額でした。一方、高階弥太郎は明治 12 年から単独で郡村戸長を務め、同 17 年 10 月に退職するまで郡村の行政を担当します（『岡山縣郡治誌』上巻）。しかし組合の総会には明治 18・19 年に出席しただけでした。

高階家の墓所は正授寺跡の墓地にあります。入口右手奥に「高階弥太郎長女常」墓があり、明治 14 年 12 月に 25 歳で亡くなっています。常の夫は高階喜吉（1891 没 36 歳）で、喜一郎に近い名前ですが、喜一郎は組合の会合に同 29 年（1896）までは出席しており、別人と思われます。また、墓所には享保期以降 7 基の大きい墓があり、裕福な一族であったようです。しかし、7 基とも俗名が全くなく、弥太郎の墓も喜一郎の墓も確認できません。



高階家墓所

醸造組への加入者 備前醤油醸造組の創立加入者は、明治13年（1880）5月までに「出資金」を納入した業者です。総数は56名で、10～200円を納めています（他に未納2名）。その後は、定例集会などへの「参加出席人名簿」2冊によって明治29年（1896）まで加入者がわかります。これらを7つの小組合で分けたものが表3です。

1区の郡では、老舗の高階・青山一族に加え、奥山・三宅氏などが創立時に加入し、やがて藤沢・井上・澤田・筒井氏などが加わりましたが、高階・青山一族は姿を消していきます。また、相生丸や住福丸などの醤油運漕船が多いことも特徴です。岡山区では創立時に2軒でしたが、やがて岡圓太郎など8名が参入します。2区では番田の近藤氏や北方の合田氏・岡田一族など8軒が当初から加入し、明治20年代には12～3軒へと増加します。3区の宮浦では武田・継国・安田氏が見られますが、次第に減少します。4区の北浦では、片山一族を中心に松本・森野氏が創立時に参加し、やがて片山・浮田・磯本氏らに限られていきます。5区の八浜では、藤原氏を中心に山田・一蝶・宮田氏が操業を続け、他は短い間に撤退します。一方、児島郡の対岸にある上道郡の6区では、郡南西部に北村・斉藤・小川氏が創立時に参加し、やがて郡南東部の小仁井・伊東氏らに広がります。7区では、児島郡小串の児山・山根氏と、対岸の邑久郡に井上・中島・岸野氏が加入し、以後も醸造を続けます。彼らは京都大阪に出荷をおこなう大中業者でした。

表3 明治13年出資金額(円)と備前醤油醸造組加入者・運漕約定船一覧(明治13～29)

区	郡	町村・大字	明治13	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
1区 (12・船7→24・船5)	児島	甲浦村郡 (8・船6→14・船5)	200	高階弥太郎													
			200	高階喜一郎													
			金毘羅丸	高階庭造													
			160+40	青山幸吉・幸三郎							嘉三郎			(没)	幸吉		
			150	青山寿三郎								嘉太郎					
			一力丸青山	嘉右茂													
			篤好社60														
			60	土肥修平													
			20	内藤豊蔵													
			20	奥山長之資													
			10	三宅新平	岩松												
			静波丸								八幡丸	三宅太平					
				鈴木元八郎													
							藤沢庄次郎										
							井上金三郎										
											澤田長八				儀太郎		
			相生丸	澤田義太郎													
												浜野市太郎					
															筒井周吉		
			住福丸	和田勝造													
			長栄丸	須々木庄吉													
											永福丸	児島松太郎					
											大神丸	小(太)田栄五郎					
	見石		120	高島孝太郎													
			10	藤原長三郎													
			由加丸														
	末山町		20	真殿健次郎													
	浜田町		20	浜田元次郎													
	東中島町						岡円太郎										
	児島町						山崎重吉										
							山崎松次郎										
	天瀬						石津信近										
							多(太)田善五郎										
	不明						岡崎銀五郎										
							松本栄次郎										
							柳沢純一										
岡山区(2→9)																	

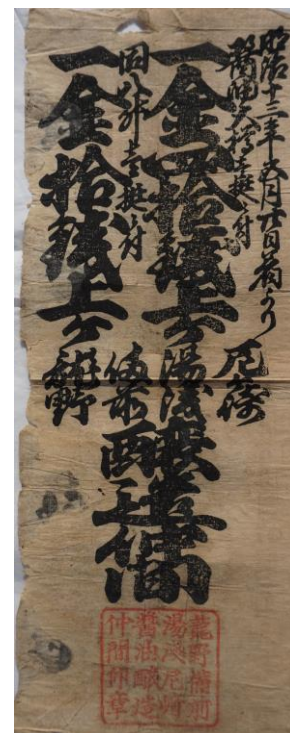
表3-2

区	郡	町村・大字	明治13	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29				
2区 (8・船2 →13・船2)	児島	鉢立	番田	200	近藤三郎二																
				40	近藤鶴次郎＝紋次郎																
				40	高島豊次郎										秀吉郎			豊次郎			
				宝福丸 合田勝五郎										万右衛門							
				中福丸 藤原辰三郎																	
			北方	70	合田俊三										(没) 精一郎						
				60	岡田嘉十郎																
				60	岡田島吉																
				20	岡田撰五郎																
					岡田紋吉																
	岡田紋次郎										(岡田治三郎										
	岡田辰次郎																				
	井上紋之資																				
	井上梅三郎																				
											松島要										
	下山坂	40	福原庄平		福原峰二																
3区 (8・船2 →14・船2)	児島	大門	阿津	20	玉置佐一郎										若宮丸 大浜梅吉						
				50	武田栄次郎																
				50	継国安次郎										富次郎						
				20	安田文次郎																
				20	安田多曾吉										安田安次郎						
			宮浦		宮川巳之吉																
				勢立丸 三宅作次郎										平谷与次平							
														住吉丸 安田英三郎							
				4区 (8・船1 →8・船1)	児島	甲浦	北浦	150	片山勝太郎												
								140	片山竹五郎												
100	片山量平 要造										(没) 量平										
50	片山文吉										片山利三郎										
50	松本清治																				
50	松本友三郎																				
30	森野庄太郎																				
15	橋本竹次郎										岡本喜五郎 又次郎										
	藤原栄(米)三郎										浮田定五郎										
											磯本又次郎 又三郎										
	金毘羅丸 藤澤友造 庄次郎																				

四ヶ国連合の成立 備前醤油醸造組は組織の確立と同時に、龍野などの醤油産地との連携や京都大阪の醤油問屋との価格交渉を始めます。醤油価格の交渉は「値組」と呼ばれ、明治12年の年末から翌年始にかけて、二人の惣代を京都に派遣して行われました。しかし、醤油問屋の拒否により決着しません。2月になると、同じ立場の龍野醤油から、大阪での値組に代表を派遣するよう要請されます。同時に、備前から申し入れていた醤油産地の「^{れんかい}各国聯合」に賛否両論ながら受け入れ可能と伝えてきます。そこで、備前は小豆島に近藤・高階を派遣し、龍野は姫路や尼崎・湯浅に使者を送り、3月14日、備前と龍野は大阪で初めて会合を持ちます。大阪問屋との交渉は同24日に23銭値上げで決着がつきます。同27日には、龍野・備前・尼崎・湯浅の代表者が大阪で会合し、仮規則を了承して連合組織を結成しました。30日には大阪・高津桃山（現大阪市天王寺区東高津町か）に花見の宴を開き、交流を深めたようです。

ところが、翌5月11・12日にも大阪問屋との値組が行われ、今回は決裂します。四ヶ国連合は傘下の醸造元に醤油の出荷停止を指示し、同20日には右のような値上げ札を各店頭で配付します。こうして、備前醤油醸造組の活動は、各地の醤油産地の団結にもつながっていき

明治13年5月20日値札



備前醤油の京阪出荷樽数は、醸造組が結成される前の明治12年後半には約1万挺だったのが、その後次第に回復していきます。醸造組に加入する業者も増加していきます。明治29年(1896)までのその変化を表5でまとめました。

表5 明治12～25年の備前醤油組の出荷樽数・組合幹部・組合員数・定期集会参加数

明治	出荷樽数(挺)		組合幹部				組合員数	定期集会参加
	京都行	大阪行	組頭	副組頭	年番			
13	49,969		篤好社	近藤三郎二	高階喜一郎	合田俊三	50	30
14	51,348			近藤三郎二		中島長七郎	53	
15	27,087	25,862	組頭代理 鈴木元八郎	近藤三郎二			51	
16	26,941	26,809	組頭代理 鈴木元八郎	近藤三郎二			58	27
17	53,320						65	37
18	49,467						67	51
19	59,118		近藤三郎二				67	45
20	40,506	22,376	合田俊三	近藤三郎二	近藤紋次郎	岸野秀蔵	64	52
21	46,727	24,551	合田俊三	近藤三郎二	近藤紋次郎	岸野秀蔵	65	51
22	49,970	22,129	欠	近藤三郎二	近藤紋次郎	片山勝太郎	69	55
23	44,311	24,181	中島長七郎	岡圓太郎	岸野秀蔵	片山勝太郎	72	53
24	51,434	26,900	中島長七郎	岡圓太郎	近藤三郎二	近藤敬次郎	64	56
25	57,523	25,994	岡圓太郎	岸野秀蔵	近藤三郎二	近藤敬次郎	63	59

出荷樽数(挺)・組合員数および明治20年以降の組合幹部名は1987刊『活路開拓ビジョン調査事業報告書』による。空欄は不明である。

名古屋出荷と汽車輸送

明治24年（1891）1月、備前醤油醸造組は、名古屋市醤油問屋の4人と委託販売の契約を結びました。^{たまり}溜醤油や^{しろ}白醤油発祥の地である名古屋へ、新たに販路拡大をめざしたのです。これに応じた組内醸造元は、右の表6のように初回15人で、同年3月から半年ずつ3回、問屋4人に1樽ずつ出荷します。大きな特徴は、一昨年に市制を敷いた岡山市の醸造家が市場開拓を目指していることです。ところが、同年8月、名古屋向け醤油を海路輸送していた^{へいあんまる}平安丸という船が遭難し、醤油残品の売却収入などが補償のために使われました。そのため、翌年1月の出荷数は8人合計60樽に減ってしまいました。表6はこの時の醸造家と出荷数をまとめたものです。各業者の銘柄がわかります。

一方、この事件をきっかけに輸送方法が変化します。ちょうどこの年3月、山陽鉄道が岡山まで開通し、京阪神から名古屋方面が陸路で結ばれます。備前醤油醸造組は、同年7月、内国通運会社岡山支店と「定約証」を交わして、大阪・京都・名古屋へ年間1万5千樽の醤油樽を汽車積輸送することにしました。また、岡山京橋川岸から岡山停車場まで1樽1銭5厘で運びます。こうして、従来醤油を海路輸送していた船は、最寄りの港から岡山京橋付近への輸送業務に切り替わることになりました。

表6 明治24～25年備前醤油の名古屋出荷

住所	醸造家名	証標銘柄	M24.3	M24.8	M25.1	出荷合計
郡	三宅岩松	極上	4			8
		三 生		4		
	藤沢莊次郎	巴口	8	8		16
	井上金三郎	(井) 別	4			4
東中島町	岡円太郎	赤一□	4	4	4	24
		青一□	4	4	4	
		志一□				
上片山町	岡崎銀五郎	岡 竹	8			24
		岡 備前一		4	4	
		岡 関西一		4	4	
天瀬	石津信近	い 玉	8			16
		い 〇〇		4	4	
児島町	山崎重吉	分	8	8		24
		分 無類			8	
久山町	多田善五郎	分 壽	8	4		12
岡山	松本栄次郎	令 別	4	2		6
番田	近藤三郎二	赤丸	8	8	8	24
	近藤紋次郎	玉菱	4	4		8
北方	岡田辰次郎	〇	4	4		8
北浦	片山勝太郎	西 都	8	8	8	24
	片山竹五郎	※		8		8
江並	北村周造	中 曙			8	8
江崎	斉藤伝三郎	は 井	4	8		12
西幸西	中島長七郎	六	8	8	8	24
出荷合計			96挺	94挺	60挺	250挺

東近藤家文書「名古屋送醤油挺数并代価区分帳」より作成。

3 備前醤油の盛衰

近藤三郎二の略歴

表2の児島郡番田村の欄には、寛政～文化期（1793～1807）に中屋紋次郎、天保13年（1842）には中屋^{なかやもんじろう}三郎右衛門が見えます。番田・赤マル醤油の『経歴書』には天明3年（1783）創業とあります。『近藤家墓碑銘』（近藤保著1972刊）では、前者は中屋二代近藤紋次郎（1821没82歳）、後者はその三男で分家した新中屋近藤三郎右衛門（1773～1844）となります。これにより、18世紀末に中屋二代目が創業し分家新中屋に引き継がれたとわかります。その三代目が近藤三郎二（1837～1909）です。



晩年の近藤三郎二

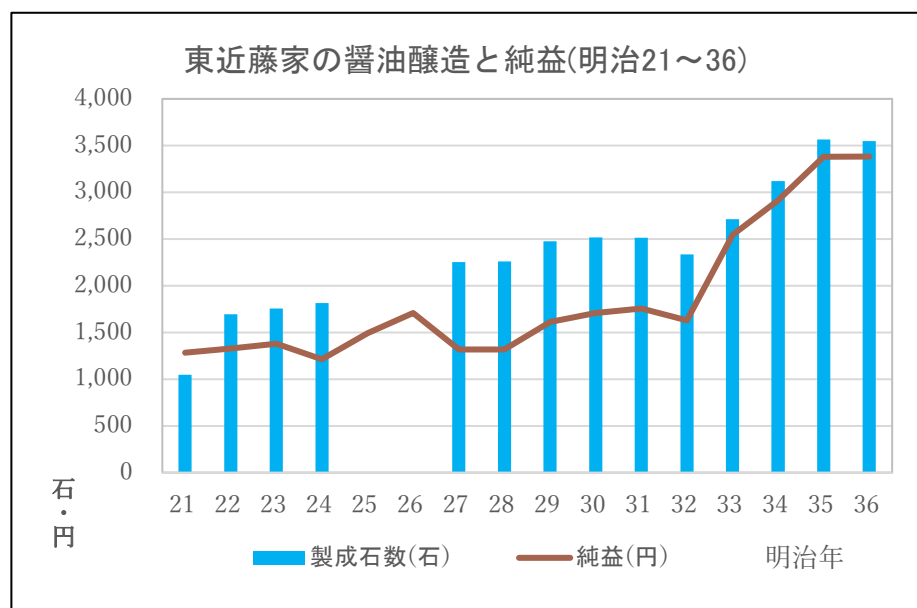
三郎二は父^{ゆうきち}雄吉が嘉永6年（1853）42歳で早逝すると、祖母^{さいい}佐伊（1870没84歳）の支えも得て家業を引き継ぎます。明治に入ると、合田俊三や高階氏らとともに備前醤油の再興に傾注し、明治12年（1879）「備前醤油醸造組」を結成します。翌年1月には副組頭に選出され、以後一貫して組合役員を歴任し、備前醤油の発展に尽しました。

明治25年（1892）の組頭岡^{えんたろう}圓太郎（1850生）の頃、醸造組は備前醤油醸造組合と改称され、役員名も組長・副組長と変わります。その前年に三郎二は、弟の長男で養子の敬次郎^{けいじろう}（1863～1932）とともに会計担当となり、明治32年（1889）まで勤続します。翌33年、家督を敬次郎に譲り醤油業を任せるようになりました。明治44年（1911）には醤油醸造11組合が集まって岡山県醤油醸造同業組合を成立させ、翌大正元年（1912）に正式発足します。近藤敬次郎はその組合長に推挙され、彼もまた岡山県の醤油業界の発展に尽力していきます。



番田八幡宮参道入口の近藤三郎二翁^{しやうとくひ}頌徳碑

近藤三郎二家の経営 近藤家が醸造した醤油は、下のグラフのように明治21年の1,046石から次第に増加し、敬次郎時代には3,500石に達しています。県外移出の樽数も4,000挺から1万挺を超えました。一方、土地所有は三郎二・敬次郎名義を合わせて明治32年に約54町あり、しかも旧番田村内12町、沖新田の旧倉益村12町など、児島・上道郡旧15ヶ村に及んでいます。明治35年前後の所得見込総額9,369円のうち、醤油関係の所得は4,142円とあり、醸造業と土地収入、



つまり小作料収入が半々という実態でした。近藤家はすでに明治22年に、味野・野崎氏に次ぐ児島郡第二位の高額納税者でもありました。なお、三郎二は明治19年には自家を東近藤と称しています。現在、玉野市教育委員会所蔵の約300点の史料は東近藤家文書と命名され、この展示に多く利用されています。

近藤三郎二の同業者支援・社会還元 近藤三郎二は自家の財源を使って醤油醸造の同業者に資金支援をしています。例えば、西幸西の中島長七郎や八浜の山田新三郎に、大豆小麦の購入代金を貸与しています。また、醤油運漕に携わる番田・藤原長三郎には、中^{なか}福^{ふく}丸^{まる}の新造費用を貸し付け、運漕賃で相殺しています。邑久郡西幸西の山口五百造には、明治15年に古船買取費を貸与し、その船の使用運賃で相殺しています。さらに社会還元として、明治15年（1882）に破損した西幸西・東幸西の海岸堤防を修築するため、番田に三郎二が所有する硬粘質の赤土300艘分を送っています。同17年8月の暴風高潮で、児島郡沿岸の塩田が壊滅しまし

たが、幸西の堤防は全く被害を受けなかったとあります。また、現在改築工事で問題の銚立小学校で、明治 27 年に改称された東児高等小学校（現在の銚立小学校）へは、同 31 年に校舎新築工事への寄付を行っています。

明治 38 年 備前醤油と京阪出荷 備前醤油醸造組の加入者は明治 23 年（1890）の 72 軒を最高に、日露戦争のあった同 38 年（1905）には 39 軒に減っています。この年、京阪地方へ醤油を出荷した 28 軒分の届が残っていて、表 7 にまとめました。出荷数第一位は江波の北村周造で 600 挺、次いで桑野の小川栄太郎、小串の児山庫次郎と続き、四位が当時副組合長を務めていた北方・岡田辰次郎でした。残念ながら組合長近藤敬次郎の届は残っていません。

表 7 明治 38 年 備前醤油の京阪出荷

居住地	醸造元	出荷地別挺数					うち汽車 輸送分
		京都	伏見	大阪	その他	合計	
児島郡	八浜	藤原元太郎	170			170	110
		山田資太郎	110			110	
		一蝶準資	75			75	
	郡	藤沢庄次郎	80		170	250	35
		井上金三郎			105	105	
		小川菊五郎	35		30	65	
		筒井数三郎	20		20	40	
		奥山虎太郎			20	20	
	北浦	片山利三郎	15			15	196
		児山庫次郎	266	165	40	471	
	小串	山根浜造	156			156	380
		岡田辰次郎			380	380	
		岡田常三郎	78			78	
岡山	東中島町	岡円太郎			20	20	
	上片上町	岡崎銀五郎	35		20	55	
	児島町	山崎重吉			20	20	
上道郡	江崎	齊藤伝三郎	66	10	75	217	132
	江並	北村周造	362		238	600	333
	桑野	小川栄太郎	465	25	75	565	210
	九幡	伊東広次	296			296	
		小仁井元作	197			197	
邑久郡	西幸西	岸野五三蔵	368			368	78
		中島長七郎	80		5	195	
		野崎真喜太	115	20	20	155	
	南幸田	井上隆吉	200	65		265	160
		井上梅蔵	120	10	30	160	
		片岡泰吉	80			80	
		近藤千春	180			180	
	五明						
	合計		3,569	295	808	636	5,308
	%		67.2	5.6	15.2	12.0	100
							20.6

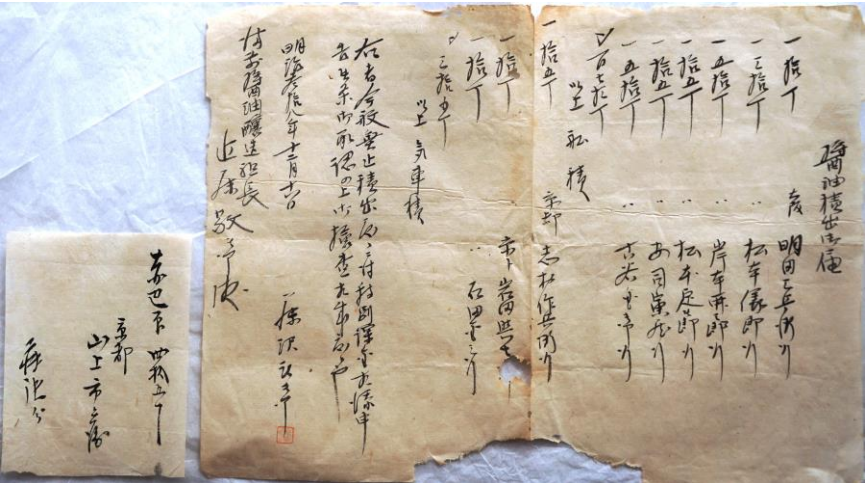
東近藤家文書 明治 38～9 年「醤油出荷届」〔仮称〕よりまとめる。

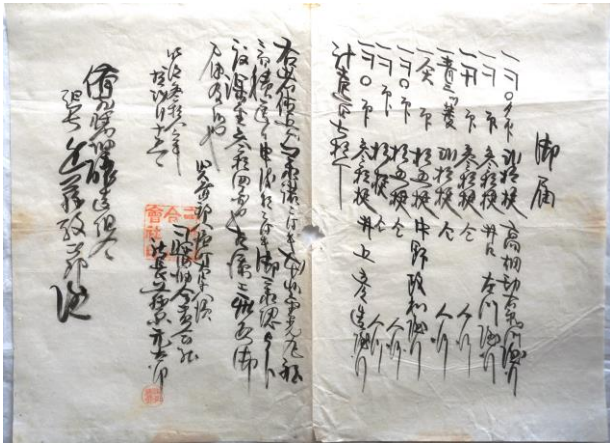
全体としては、7 割が京都向け約 3,500 挺、15%が大阪向け約 800 挺、その他となっています。また、汽車輸送は 2 割しかなく、先に明治 25 年（1892）に山陽鉄道による醤油輸送を始めたと紹介しましたが、実態はまだ海路輸送が主流であったようです。

明治 38 年

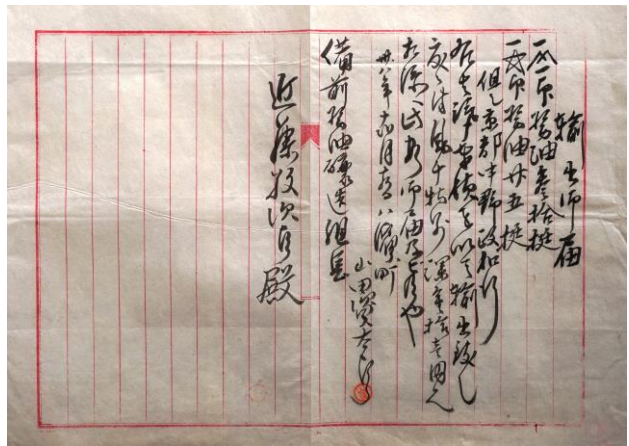
藤沢庄次郎出荷届

大阪の 6 問屋に船積みで 170 丁、京都の 3 問屋に汽車積みで 35 丁、別紙に京都へ赤巴^{あかともえ} 45 丁（汽車か不明）の合計 250 丁を送ったとあります。





明治 38 年社長藤原元太郎出荷届



明治 38 年山田資太郎出荷届

左は八浜・ㄗ (かねいちカ) 合資会社 社長 藤原元太郎 の届で、京都の4問屋に各種銘柄 170 丁を金光丸で送ったとあります。右は八浜・山田新三郎の届で、ㄴ 印 30 挺・☆ 印 25 挺を京都問屋へ汽車積みの発送予定とあります。

醤油造りで栄えた郡 郡の醤油業は、明治 13 年 (1880) の 8 軒から同 27 年 (1894) に最多の 10 軒に増えています。このうち、江戸時代からの鍋屋は青山幸吉 - 嘉三郎・青山寿三郎 - 嘉太郎家、また屋号未確認の高階喜一郎家は、それぞれ明治後期には廃業したといわれています。

一方、士族授産の篤好社はやがて経営に失敗し、その跡地を明治元年から北浦で金比羅丸による廻船業を始めていた藤沢庄次郎が引き継ぎます。庄次郎はトモエ醤油の名で醸造を行い、二代目庄次郎の大正期には年間 3,000 石を生産しています。大正 14 年 (1925) には三代目栄・友造兄弟が合資会社藤沢商店を創立し、戦後も四代目庄治郎が経営を維持しましたが、平成 15 年 (2003) に亡くなったあと、100 年超の営業を終えたということです。

この他、奥山長之資 - 虎太郎・三宅新一・岩松が見えます。また、藤沢氏と同時期に創業した井上金三郎は、井筒丸という銘柄で大正期に年産 1,000 余石に達しましたが、昭和初期に廃業しました。さらに明治 26 年 (1893) 創業の板屋筒井周吉は、二・三代数三郎に引き継がれ、昭和 11 年 (1936) に廃業、大正期に開業した小川菊五郎は昭和 30 年 (1955) まで操業しています。また郡港では、住福丸の和田勝造が醤油輸送を担当し、相生丸の沢田長八 - 義太郎も大正初期まで運漕を続けました。さらに、先代が大和丸で創業していた家野惣吉は、大正期に醤油業を開始し、戦後も家野久美郎・菊三郎が引き継ぎ、和田勝造の孫豊太郎と岡山で共同醸造販売を行っていたといわれています。



地図Ⅰは、現代の郡地区の地図に、確認できた旧醤油醸造家の位置を示したものです。郡港の岸壁近くに醸造家が集中しているのがわかります。また、その一角には、番田出身で醤油樽や酒樽造りを一手に引き受けたという畑上家の居宅もあります。こうして、醤油造りが盛んであった昔の郡の風景が蘇ってきます。

昭和31年(1956)に完成した児島湾締切堤防の郡側の付け根には、今も残る火袋



と笠のない燈籠が建っています。その内側にある郡港には、岸辺から延びる栈橋に大小の船が繋がられています。栈橋の右手には藤沢醤油などの醤油蔵が立ち並んでいるはずですが、写真画面からは外れています。海岸の向うには大きな蔵が3棟ほどあります。何会社の倉庫でしょうか。煙突はないので醤油倉庫ではないようです。

昭和30年代の郡港（岡山市立中央図書館提供）

伝統を守った八浜 明治13年の八浜の醤油業者は8軒ですが、醤油醸造組への出資金は少額で、郡に比べて醤油業は

衰えていました。米谷・松谷家は上方向けの醤油生産を断念し、牛窓屋の後裔である那須伝太郎－朋太郎や郡屋の平岡徳太郎も、先祖の家業復活を諦めたようです。宮田楨造－友次郎、一蝶仲造－準資は醸造を続けますが、大正期には名前を確認できません。藤原久三郎の弟藤原虎太郎（亀乃井）と前田芳平（快菊）は本来酒造家で、醤油は兼業程度でした。

その中で藤原久三郎（1838～1902）は100円の出資金を出し、八浜の醤油醸造業の中心として活動しました。明治23年（1890）に家督を引き継いだ元太郎（1866～1933）は、同25年に玉井村長のち八浜村長・八浜町長となります。公務の傍ら、明治31～32年に備前醤油醸造組合の副組長となり、同32年（1899）に金^{かね}一^{いち}醤油合資会社を創立、同社は^{かねいち}大正2～13年（1913～24）に岡山県醤油醸造組合の副組長の事務を担当しています。一方、山田氏の出身で郡屋政吉（1863没）に入婿した山田新三郎（1832～1903）は、文久3年（1863）に山田醤油を創業し、二代目資太郎（1862～1931）、三代目善重郎（1961没）、四代目二郎氏と続き、約150年間、備前醤油発祥の地の伝統を守りましたが、平成20年（2008）惜しまれながら廃業しています。

また、八浜の隣村見石では、藤原長次郎（1868生）が先代藤原松造（1843生）の醤油醸造業を引き継ぎ、大正期には年産2,000石に成長します。昭和13年（1932）には株式会社藤長本店を創立し、戦後、ヒシナカ醤油と改称し、輝代喬氏^{ともりの}が引き継ぎました。また、大正期には、藤原松造の三男朝則^{まるじゅう}（1886生）が八浜に移って〇十^{まるじゅう}醤油を操業し、年間300石を生産して、平成期まで続けました。

右の写真は八浜の町の西にある両児山の鞍部から撮影したものです。二本のレンガ造りの煙突が立っています。左の煙突は藤原酒造（慶応元年創業）、右は山田醤油（文久3年創業）の煙突です。写真左手から、**現在の八浜の風景**



鎌田鮮魚店、藤原酒造の前を通り、突き当たりの山田醤油までのびた通りを八浜本通りといいます。八浜の街はこの通りを中心に広がり、藤原酒造のような和瓦・なまこ壁の建物が並ぶ伝統的な町並みでした。それらを少しでも守るために、八浜町並み保存推進委員会の皆さんが様々な活動を行っています。



地図Ⅱは、復元した明治初年の八浜の地図に醤油業者の位置を書き込んだものです。八浜本通りに面した位置に多くが集中し、元川に架かる旭橋やその上流の船着場から小船で醤油樽を乗せ、沖合で待つ運漕船に積み込んで出荷しました。

4 大正～戦後の備前醤油

全県組織の結成と備前醤油 大正元年（1912）9月、全県組織の岡山県醤油醸造同業組合が正式に成立しました。傘下の組合員数は、大正5年（1916）の610軒が最多で、昭和12年（1937）には410軒になります。旧備前醤油地域でも、大正元年の26軒から昭和10年の17軒へと減少します。この間の名簿は残っていませんが、旧児島郡東部に限って、いくつかの史料からこの期の醤油醸造業者をまとめたものが表8です。郡の藤沢・小川、八浜の山田醤油は戦後まで続きます。郡の井上、番田・近藤醤油は昭和10年頃には消え、近藤醤油は赤マル醤油に変わります。一方、大正期には郡・家野、見石・藤原、八浜・藤原（○十）と、新たに田井で岡本、日比に高尾醤油が創業します。しかし、掲載されなかった業者もあるでしょう。

昭和12年に日中戦争が始まると、同14年、岡山県醤油工業組合が設立され、それまでの県同業組合は解散します。醤油は戦時体制下で価格統制され、廃業する業者もでました。敗戦後、経済の民主化が進められ、全国醤油醸造協会の地方組織として、昭和24年（1949）6月、現在の岡山県醤油工業共同組合が設立されました。組合員数は306名で、旧児島郡東部の加入業者は表8のように16名です。しかし、75年後の今日、そのすべての業者は廃業し、岡山県全体の醤油醸造業者も17名になっているとのことです（県醤油工業共同組合前理事長岡本研吾氏〈新見・カツマル醤油〉の談）。

表8 大正～戦後の児島郡東部醤油醸造家

居村	大正11・A	大正13・B	昭和10・C	昭和23・D
郡	井上金三郎			
	藤沢庄次郎		栄・友造	合資会社 藤沢商店 藤沢庄治郎
	小川菊五郎			
		家野惣吉		家野久美郎 ・菊三郎
				和田豊太郎
北浦	片山利三郎			
小串	児山信六			
				山根一郎
番田	近藤敬次郎		近藤敬次郎	赤マル醤油 醸造株式会社 森治郎
北方	岡田常太郎			
	合田精一郎			
胸上				三宅秀夫
八浜	藤原朝則			
		加門仁三郎		近藤久三郎
		藤原元太郎		
				山田善重郎
見石	藤原長次郎			
田井		岡本喜三郎		岡本靖之
				梶田忠一
				木下正司
日比	高尾周三郎			高尾寛一

史料A 岡本芳衛編『岡山県児島郡案内誌』大正11(1922)刊

史料B 『岡山県興信録』大正13刊

史料C 『昭和十一年山陽年鑑別冊現代岡山縣人名選』昭和10.10刊

史料D 醤油醸造協会編『全国醤油醸造業者名簿』昭和23.12刊



岡本岩松編輯『岡山縣児島郡案内誌』（1922 発行）掲載の藤沢庄次郎・合田精一郎・近藤敬次郎の記事を紹介します。

は夫人との間に二男一女あり長男次男東京に在學長女山陽高等女學校を卒業せり

醬油醸造元
近藤敬次郎君
(錦立村)

(君郎次敬藤近)

五回内國勸業博覽會等にて名譽金牌受領せり、以て品質の優良なることを知るべし、京阪神に販路を擴め醸造高一ヶ年七千石に達せり、尙君は明治三十一年岡山縣醬油醸造組合長に推され以來今日に至る、其外營業稅審査員に推さる、家庭に

兒島醬油の代表的「赤玉印」「玉龍」の醸造元近藤家は天明の創業にして四代其業を營む。
其製品の秀拔なる事多年、内外各博覽會に出品して常に最高賞牌を受領せること



東近藤家旧宅（昭和 59 年 12 月撮影）

赤マル醤油の創立 近藤三郎二が確立した近藤醤油は、赤マルと玉龍の二銘柄を醸造しながら近藤敬次郎に引き継がれました。敬次郎は昭和 7 年（1932）に亡くなり、子の三之介が敬次郎と改名して引き継ぎ、同 9 年には合資会社近藤敬次郎商店を創立します。しかし、戦時体制が強化される中、同 14 年（1939）に休業となりました。翌 15 年、名古屋市に赤マル醤油醸造近藤家造株式会社が、社長森治郎（名古屋出身）・近藤敬次郎・森熊市（笠岡出身）らによって設立されます。販売部門として岡山市に赤マル商事株式会社が設けられます。そして同 17 年には、番田工場が広島の子品陸軍糧秣廠の指定工場となり、軍需醤油の生産を始めます。

戦争が終わり、経済の民主化と戦後復興が始まる中、昭和 23 年（1948）6 月、両社が合併して赤マル醤油醸造株式会社となり、翌年 8 月には本社を名古屋から番田に移します。社長も森治郎から藤井熊市（1886 生）にかわり、さらに昭和 28 年（1953）には子の麗介（1914～2000）が社長に就任し、その後を義久氏が受け継ぎました。しかし、平成 24 年（2012）義久氏が亡くなったため、赤マル醤油もついに廃業となりました。近藤本家による天明期以来、約 230 年間の操業でした。



昭和 30 年ころの赤マル醤油醸造会社全景（藤井家提供）

『番田・赤マル醤油の貴重な記録』

1. 史料紹介

300年間の備前醤油最後の醸造者、番田・赤マル醤油の社長故藤井義久氏宅に残されていたアルバムの中から、選りすぐりの写真を紹介します。醤油の製造や販売の実態、番田の昔の風景がわかるものです。撮影時期は、昭和30年（1955）前後と思われます。今から約70年ほど前のものです。

2. 赤マル醤油会社全景	13. 醤油を絞るプレス機の並ぶ部屋
3. 正門と事務所	14. 樽造り作業
4. 新しい醤油蔵の完成	15. 醤油の瓶詰め作業
5. 赤マル醤油の水源池	16. 完成した醤油樽
6. 用水路に面して建つ倉庫群	17. 各種赤マル醤油の製品
7. 倉庫入口に立つ櫓	18. 船の積み込み作業
8. もろぶたの保管部屋	19. 特約店 日比・宮本商店
9. レンガ造りの培養倉庫	20. 醤油4社の看板
10. 倉庫内部の光景	21. 赤マル醤油愛用者感
11. 二基のボイラー	22. 古い型のバスが走る番田の風景
12. コンクリートタンクの諸味	

令和5年度後期展示

まぼろしの備前醤油を求めて－300年の歩み－

共催：玉野市文化財保護委員会・玉野市教育委員会

